

令和5年度 浜松市国語科研究部 第2回研修会 全体会報告

日 時 令和5年8月1日（火）9時30分～16時30分

全体会（講話）・ブロック別研修

会 場 浜松市産業展示館



研修内容

講演 「国語科における『自己調整』と学習構想の工夫」

静岡大学教育学部 坂口 京子 氏

国語科における「自己調整」と学習構想の工夫

- ①「自己調整」の最重要点は、教師が、子ども一人ひとりが成長するための見取りを行い、次の指導において育てることである。
- ②子どもにとっての「評価（自己評価）」は「学ぶ価値のある対象」に関する学びをメタ的に捉える眼をもつことから始まる。
- ③深い学びをどう実現するかを第一として、授業やカリキュラムを構想し、探究的な学習（行事・総合的な学習の時間等）とも結び付ける中で、自己評価の適時性を意識した場を設定することが重要である。
- ④深い学びの実現には、教師が、「教科の本質的な内容」と子ども、言語活動（言葉）と子ども、子どもと子どもを結び付ける意識が必要である。
- ⑤学習集団および子どもの認知過程を視野にいれ、特性に合った指導を螺旋的に構想する。
- ⑥「自己調整」を育てるためには、国語科を核に、1年あるいは2～3年のスパンで適宜修正を加えながら、意図的に組み立てることが大切である。
- ⑦指導の中で目指すのは、生涯に渡って培うべき自己調整力の基礎を育てることである。

指導講評

浜松市教育委員会指導主事 松本 真美子 氏

「言葉の力」を育てる魅力的な国語科単元の創造

- ①国語科では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成することが求められている。
- ②授業改善には、「言葉の力（資質・能力）」を育てる魅力的な単元を創造する中で、子どもたちが主体的に学びを調整できる場を設定することが重要である。
- ③子どもたちの「言葉の力」や「主体的に学びを調整できる力」を育成していくためには、児童生徒の実態を捉え、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が大切である。